

## 『新生』から『夜明け前』へ(6)

De “Shinsei” a “Yoakemae”

— sur les oeuvres de SHIMAZAKI Touson —

佐々木 涇

SASAKI Thoru

### VI-1-(1)

昭和四年新年特別号とされた「中央公論」に島崎藤村の文章「『夜明け前』を出すについて」が掲載された。同誌での発表予告である。

「私は今ある試みを思ひ立つてゐる。しばらく私も長い物語を書く機会がなくて過ごしたが、昨年本誌に短篇『分配』を寄せた後あたりからまたその心が動いて來たので、今度新たに『夜明け前』の稿を起し、成るに随つて本誌に寄せることにした。

この作は相應の長さにも達しようと思ふから、これを連載して行くには左の方法によりたい。

一月、四月、七月、十月に互つて掲載して行くこと。

第一回は來る四月號よりのこと。」(註1)

この予告どおり藤村は、この年の「中央公論」四月号から年四回掲載し、昭和七年一月号の第十三回で第一部を終了した。続いて同じ年の四月号から第二部が開始され、第十五回目の昭和十年十月号で完結となっている。このようにして七年間の二十八回に渡って分載されたのが『夜明け前』である。

この作品の連載中である昭和九年一月十日付けの「東京朝日新聞」に次のような談話が載った。

「……今年中にはどうしても完成するつもりで居りましたが、來年の四月まではどうしてもかかりません。だが、夜明の聲だけは聞けるでせう。私は父といふものについて餘り考へてみたこと

はなかった。十三の時に逢つたのが最後で、それから二年して父は死にました。薄い印象です。外遊三年の間のさびしい生活、それが私に「父」を考へさせました。自分の父はどふいふ生活をしてゐたか、父の時代はどんな時代だったか、それからそれへと思ひはつながつて筆をとつてみようと思つたのが『夜明け前』です。」(註2)

この時点で初めて『夜明け前』の主人公青山半藏が藤村の父親であることが明らかにされたと思われる。またさらに『夜明け前』が完結したこの年の「新潮」十二月号に掲載された、青野季吉との対談(『夜明け前』を中心として)でも同様なことを明らかにしている。

「青野。話は少し變りますけれども、あの主人公の青山半藏は、何かモデルといふようなものがあつたのでございませうか。

島崎。さうです。あれは實は自分の親父をモデルにして居りますのですが……。」(註3)

藤村が父親をモデルにしたのは何故か。同じ対談の中で次のように語る。

「親父は一たい私が英學をやるといふ時に大へん心配した人でございまして、餘ほど經つてから「宜からう」なんて言つて呉れたんですが、そんな風であつたものですから、幼い時分には、親父はただ怖い人のやうに思つて居りました。さうですねえ、私が巴里へ參つた時は四十二の齡でございましたが、漸く四十代くらゐになつ

て親父の歌集などを、それも外國の旅で寂しい  
ものですから、讀んでみるうちに、親父の生涯  
などもまあ幾らか解つて來たやうな氣持があつ  
た。そして歸つて參つてから、自分が、父の生  
涯といふものを本當に一つ探してみよう、とい  
ふ風に思ひ立つたのが、あの作のつまり動機で  
ございますね。」 (註4)

## VI-1-(2)

本論で『新生』の内容を辿ったときにすでに岸  
本の父、つまり藤村の父についていくらか触れた。  
先の対談の中で語られたように、バリ滞在中のこ  
とである。ならば、それ以前では藤村の作品の中  
ではどのように扱われ、描かれていたであろうか。  
まずこの点を及ぶ限り見ておきたい。

明治四十一年三十七歳のときに発表した『春』  
の五十章の部分である。主人公岸本が坊主頭とな  
り、墨染めの法衣を身にまとして放浪した後に長  
兄民助の前に姿を現した。このとき、民助の目を  
通した父親の姿が浮ぶ。

「其時、長火鉢に翳して居る岸本の手が妙に民  
助の眼に着いた。不格好で、指先が短くて、青  
筋が太く刻んだやうに顯れたところは、どう見  
ても亡くなつた父の手にソックリであつた。父  
は足袋も圖無しを穿いた程の骨格であつたから、  
大きさは比較に成らないが、弟の手は父のを若  
くしたといふ迄で、形ばかりでなく、蒼白い表  
情までも實によく似て居た。それを見ると、十  
七の歳から身代を任されて、親孝行と言はれた  
丈に苦勞をしつゝけた、その自分の過去が彼の  
胸に浮んだ。民助の眼で見ると、維新の際には  
勤皇の説を唱へたり、諸國を遍歴するやら、志  
士に交を結ぶやらして、殆んど家のことなぞを  
顧みなかつた人の手が其だ。どうかすると黙つ  
て家を出て了つて、二月も三月も歸らないから、  
其度に峠の爺なぞを頼んで、連れて來て貰つた  
人の手が其だ。平素はまことに好い阿爺で、家  
の者にも親切、故郷の人々にも親切で、一村の  
父のやうに慕はれて居たが、すこし癪癪が起つ  
て氣に入らないことが有ると、弓の折で民助を  
打擲した人の手が其だ。國學や神道に凝り過ぎ

たともいふが、深い山里に埋れて、一生煩悶し  
て、到頭氣が變に成つた人の手が其だ。『阿爺  
さん、子が親を縛るといふことは無い筈ですが、  
御病氣ですから堪忍して下さい。』斯う民助が  
言つて御辭儀をして、それから後手に括し上げ  
た人の手が其だ。ありあまる程の懷を抱き乍ら、  
是といふ事業も残さず、終には座敷牢の格子に  
掴まつて、悲壯な辭世の歌を讀んだ人の手が其  
だ。

『捨吉も年頃だ。そろそろ阿爺が出て來たんぢ  
ゃないか。』

斯う民助は心を傷めた。何でも、父が二十の  
年齢とかに、初めて病氣が發つて其時は癒るに  
は癒つたが、それから中年になつて再發した。  
この事實を民助は思ひ浮べた。而して、二十の  
年齢といふから、あるひは弟と同じやうな動機  
で。斯様な風に想像して見た。」 (註5)

ここに登場する「動機」は、父親の場合のそれ  
は不明であるが、捨吉の場合は明らかである。恋  
の苦しみであり、それがために、頭を丸め、墨染  
めの法衣を着ての放浪であつた。この姿は若き藤  
村の姿でもあつた。故郷で父とともに生活を営ん  
だ長兄が、弟の奇行を父親の姿に重ねてもおかし  
くはない。

長兄にとっては好ましくない父親像である。言  
わば、負の面がここでは語られ、弟はその可能性  
ありとされたのである。しかし、藤村が作者とし  
てこの場面を描写する限り、この負の面は克服さ  
れているとしてよい。

『家』では何回か父親について語られる場面が  
登場する。先ず上巻であるが、主人公の三吉が姉  
のお種の婚家先を訪れた時のことである。

「三吉も入つて來た。

『貴方。』とお種は夫の方を見て、『鳥度まあ  
見てやつて下さい。三吉がそこへ來て坐つた様  
子は、どうしても父親さんですよ……手付なぞ  
は兄弟中で彼が一番よく似てますよ。』

『阿爺も斯様な不格好な手でしたかね。』と三  
吉は笑ひ乍ら自分の手を眺める。

お種も笑つて、『父親さんが言ふには、三吉  
は一番學問の好きな奴だで、彼奴だけには俺の

事業を繼がせにやならん……何卒して彼奴だけは俺の子にしたいもんだなんて、よく左様言ひ言ひしたよ。』

三吉は姉の顔を眺めた。『あの可畏い阿爺が生きて居て、私達の爲てることを見ようものなら、それこそ大變です。弓の折かなんかで打たれるやうな目に逢ひます。』

『しかし、お前さんたちの仕事は何處へでも持つて行かれて都合が好いね。』とお種が笑つた。

達雄は胡坐にした膝を癖のやうに動ぶり乍ら、『近頃の若い人には、大分種々な物を書く人が出來ましたネ。文學——それも面白いが、定つた収入が無いのは一番困りませう。』

『言はば、お前さん達のは、道樂商賣。』とお種も相槌を打つ。

三吉は答へなかつた。』 (註6)

達雄とはお種の夫である。そして、仕事の話が「文學」ということで、ここにおいても主人公である三吉は藤村自身であることがわかる。

さて、ここでは父親に最も似ているのがやはり三吉となっているが、この長姉は長兄とは違って父親を好意的に受け留めている。その上、父親の代弁者として末弟を励ましてさえいる。

東京に戻った三吉は長兄、實の妻お倉が話す昔話の中で父親の姿を知る。

「嫂に言はせると、幾百年の前、故郷の山村を開拓したものは兄弟の先祖で、其昔は小泉の家と、問屋と、峠のお頭と、其の三軒しかなかつた。谷を耕地に宛てたこと、山の傾斜を村落に擇んだこと、村民の爲に寺や薬師堂を建立したこと、すべて先祖の設計に成つたものであつた。土地の大半は殆んど小泉の所有と言っても可い位で、それを住む人に割き與へて、次第に山村の形を成した。お倉が嫁いで來た頃ですら、村の者が來て、『旦那、小屋を作るで、林の木をすこしお呉なしよや』と言へば、『オ、持つて行けや』と斯の調子で、毎年の元旦には村民一同小泉の門前に集つて先ず年始を言入れたものであつた。其時は、祝の餅、酒を振舞つた。斯の餅を搗だけにも、小泉では二晩も三晩もかゝつて、出入の者が其度に集つて來た。『アイ、

目出度いのい』——それが元日村の衆への挨拶で、お倉は胸を突出し乍ら、その時の父や夫の鷹揚な態度を眞似て見せた。

斯の『アイ、目出度いのい』は弟達を笑はせた。

『眞實に、有る物は皆な分けて呉れて了つたやうなものですよ。』とお倉は思出したやうに、『それが舊からの習慣で……小泉の家は左様いふものと成つて居ましたから……吾夫もね、それも未だ少壮い時に、どうでも斯うでも小泉の旦那に出て貰はんければ、村が治まらないなんて言はれて、村長にまで引張り出されたことが有りましたよ。彼時だつて、村の爲に自分の物まで持出してサ……父親さんは又、癩の起る度に家を飛出す。峠の爺を頼んで連れて來て貰ふたつて、お金でせう。何度にか山や林を売りました。所詮是ではヤリキレないと言つて、それから吾夫が郡役所などへ勤めるやうに成つたんです。』 (註7)

長兄の語る小泉家が、その村にあっていかに重要な位置を占めていたかが判る。小泉家があつてこそその村であり、村の衆が生きてこられたのであるとしている。しかし、父親がこの小泉家の歴史の齒車にうまく組み込まれずにはみ出している。その犠牲者が自分の夫、つまり三吉の長兄だとしている。嫁いで來た嫁の立場から舅を見たのであり、仕えるべき小泉家を中心に据えての考え方で父親を見たのである。

下巻でも嫂のお倉は語る。

「お倉の話は父忠寛の晩年に移つて行つた。狂死する前の忠寛は、眼に見えない敵の爲に悩まされた。よく敵が責めて來ると言ひ言ひした。それを焼拂はうとして、ある日寺院の障子に火を放つた。親孝行と言はれた實も、そこで據なく觀念した。村の衆とも相談の上、父の前に御辭儀をして、『子が親を縛るといふことは無い筈ですが、御病氣ですから許して下さい』と言つて、後ろ手にくゝし上げた。それから忠寛は木小屋に仮に造つた座敷牢へ運ばれた。そこは裏の米倉の隣りで、大きな竹藪を後にして、前手には池があつた。日頃一村の父のやうに思は

れた忠寛のことで、先生の看護と言つて、村の人々はかはるがはる徹夜で勤めに來た。附添に居た母の座敷は、別に疊を敷いて設けた。そこから飲食する物を運んだ。どうかすると、父は格子のところから母を呼んだ。『ちょつと是處へ來さつせ』と油斷させて置いて、母の手のちぎれる程引いた。薄暗い座敷牢の中で、忠寛の仕事は空想の戦を紙の上に描くことで有つた。さもなければ、何か書いて見ることで有つた。忠寛は最後まで國風の歌に心を寄せて居た。ある時、正成の故事に倣つて、糞合戦を計畫した。それを格子のところで實行した。母も、親戚も、村の人も散々な足利勢であつた。……

皆な笑ひ出した。

『私は阿爺さんの亡くなる時分のことをよく知りません。御蔭で今夜は種々なことを知りました。』と三吉は嫂に言つた。『あれで阿爺さんは、平素は奈様な人でしたかネ。』

『平素ですか。癪さへ起らなければ、それは優しい人でしたよ。宗さんが、貴方、子供の時分と來たら、ワヤク（いたずら）なもので、よく阿爺さんにお灸をすゑられました…阿爺さんはもう手がブルブル震へちまつて、「これ、誰か來て、早く留めさつせれ」なんて…それほど氣の優しい、目下のものにも親切な人でしたよ。』『種々なことを聞いて見たいナア。彼様いふ氣性の阿爺さんですから、女のことなぞはサッパリして居ましたらうネ。』

『えゝ、えゝ、サッパリ…でも、癪の起つた時なぞは、どうかするとお末が母親さんや私達の方へ逃げて來ましたよ…お末といふ下婢が家に居ましたあね。』

『へえ、阿爺さんのやうな人でも其様なことがありましたか。』

三吉は正太と顔を見合わせた。誰かクスクス笑つた。』

（註8）

父親の晩年のことがかなり詳しく語られているが、異常性が強調されている。そのためか三吉は「癪」が起きていない時の状態を確かめるようにして訊ね、「優しい人」とされて安堵を覚えているようだ。さらに三吉は父親の書いたものを見ながら、姉のお種の話を書く。

「三吉は思ひ付いたやうに、戸棚の方へ起つて行つた。實が滿洲へ旅立つ時、預つて置いた父の遺筆を取出した。箱の塵を拂つて、姉の前に置いて見せた。その中には、忠寛の歌集、萬葉假名で書いた短冊、いろいろあるが、殊にお種の目を引いたのは、父の絶筆である。漢文で、『慷慨憂憤の士を以つて狂人と為す、悲しからずや』としてある。墨の痕も淋漓として、死際に震へた手で書いたとは見えない。

父忠寛が最後の光景は、いつも三吉が聞いて見たく思ふことであつた。お鶴が通夜の晩に、皆な集つて、お倉から聞いた時の話ほど、お種は委しく記憶して居なかつた。そのかはり、お種はお倉の記憶に無いことを記憶して居た。

『大きく「熊」といふ字を書いて、父親さんが座敷牢から見せたことが有つたぞや。』とお種は弟に微笑んで見せて、『皆な、寄つて集つて、俺を熊にするなんて、左様仰つてサ…』

『熊はよかつた。』と三吉が言つた。

『それは、お前さん、氣分が種々に成つたものサ。可笑しく成る時には、アハ、アハ、獨りでもう堪へられないほど笑つて、そんなに可笑しがつて被入つしやるかと思ふと、今度は又、急に沈んで來る…私は今でもよく父親さんの聲を覚えて居るが、きりぎりす啼くや霜夜のさむしろに衣かたしき獨りかも寝む、左様吟じて置いて、ワアツと大きな聲で御泣きなさる…』

お種は激しく身體を震せた。父が吟じたといふ古歌——それはやがて彼女の遺瀕ない心であるかのやうに、殊に力を入れて吟じて聞かせた。三吉は姉の肉聲を通して、暗い座敷牢の格子に取付た父の狂姿を想像し得るやうに思つた。彼はお種の顔を熟と眺めて、黙つて了つた。』

（註9）

これまで作品の中には表われなかった父親の内面の一部がここに見られる。お種の注目した絶筆の内容であるが、意識を喪失した文字通りの狂人ではない。「悲しからずや」としてあるのは正に自らの位置を客觀的に捉えているのである。あわせてお種の話す父親像は長兄のそれよりも父親への愛情に裏打ちされたものである。より父親を理解していると言えるし、話すに従つて氣持の高ぶ

りが表われている。三吉が離れていたがために、よく知らない父親に関心を持つのも自然である。だが、それ以上踏み込みたいとする様子はうかがわれない。兄弟の中で最も父親に似ていると指摘されているが故に、父親の内面に踏み込むには「おそれ」があったと言えまいか。

生まれ故郷の木曾を訪れた三吉は父のことを隣家の主と共に偲ぶ。

「二階の客間は、丁度以前の小泉の奥座敷と同じ向にあつて、遠い美濃の平野を一段高く望まれるやうな位置にある。そこへ主人は三吉を誘つた。桑畠は直ぐ石垣の下にあつた。忠寛の書院、母やお倉のよく縫物をした仲の間、實の居た『くつろぎ』の間、上段、離れ、倉所などゝ名のつけてあつた廣い部屋々々の跡は、眼下に見ることが出来る。温厚な長者らしい主人は、自分も往時を思出したといふ風で、三吉と一緒に縁側に立つて、あそこに井戸があつた、こゝに倉があつた、と指して見せた。忠寛の座敷牢のあつたといふ木小屋の邊は未だ残つて居た。三吉が祖母の隠居して居た二階建ての離れには、今は主人の老母が住むとのことであつた。

「や、小泉さんに進げるものがある。」

と主人は、手を鳴らして酒を呼んだ後で、桑畠の中から掘出されたといふ忠寛の石印を三つばかり三吉の前に置いた。

古い鏡も掘出されたことを、主人は語つた。忠寛の書院の前にあつた牡丹は、焼跡から芽を吹いて、今でも大きな白い花が咲く、斯様な話もした。

斯の明るい二階へも、村の人や三吉の學校友達が押掛けて來た。以前は、『オイ、三公』なぞと忸々しく呼んだ旦那衆が、改まつてやつて來て、『小泉君』とか『三吉君』とか言葉を掛けた。主人を始め、集つて來る人達は大抵忠寛の以前の弟子であつた。

『でも、忠寛先生の時分には——いくら無いと言つても——六七十俵の米は藏に積んであつた。皆な兄さんが亡くしたやうなものだわい。』

斯う笑ひ話のやうにして、高い酔つた聲で舊を語るものもあつた。」 (註10)

父親が狂人扱いされたとは言え、村人には何らかの良い意味での影響を与えていたことがうかがわれる。そして家を守つたのも父親には力があつたという評価が与えられてもいる。

すでに理解されていると思うが、これまでの引用では、描かれた父親の姿はいずれも作者の目を通したものではない。語る人間たちの、つまり肉親たちの思いや考えを通過した後に描き出された姿である。作者である藤村に伝えられ、話された姿に過ぎない。同じエピソードを何回聞かされようと藤村が捉えた姿とは言えない。

では父親と余り生活を共にしなかった藤村が、直接に捉え、描く父親の姿はどんなか。その姿は『幼き日』で語られている。(註11) 妻フユの死後二年近く過ぎ、残された子供たちと共にあって、その子供たちを描きながら、自らの幼き頃を語る内容となっている。

「どうかすると私は斯様な申談をして、子供を相手に遊び戯れます。斯ういふ私を生んだ父は奈様な人であつたかと言へば、それは嚴格で、父の膝などに乗せられたといふ覚えの無い位の人でした。父は家族のものに對して絶対の主権者で、私等に對しては又、熱心な教育者でした。私は父の書いた三字經を習ひ、村の學校へ通ふやうに成つてからは、大學や論語の素讀を父から受けました。あの後藤點の栗色の表紙の本を抱いて、おづおづと父の前に出たものです。

父の書院は表庭の隅に面して、古い枝ぶりの好い松の樹が直ぐ障子の外に見られるやうな部屋でした。明い毛氈を掛けた机の上には何時でも父の好きな書籍が載せてありましたが、時には和算の道具などの置いてあるのを見かけたことも有ります。父はよく肩が凝ると言ふ方として、銀さんと私とが叩かせられたものですが、肩一つ叩くにも只是叩かせませんでした。歴代の年號などを誦讀させました。終には銀さんも私も逃げてばかり居たものですから、金米糖を褒美に呉れるから叩けとか、按摩賃を五厘づゝ遣るから頼むとか言ひました。

「亨保、元禄……」

私達は父の肩につかまつて、御經でもあげるやうに誦讀しました。

何ぞといふと父が私達に話して聞かせることは、人倫五常の道でした。私は子供心にも父を敬ひ、畏れました。しかし父の側に居ることは窮屈で堪りませんでした。それに父が持病の癆でも起る時には、夜眠られないと言つて、紙を展げて、遅くまで獨りで物を書きました。その蠟燭を持たせられるのが私でしたが、私は唯眠くて成りませんでした。

斯うした厳格な父の書院を離れて、仲の間の方へ行きますと、そこには母や嫂が針仕事をひろげて居ります。私は武者繪の敷寫などをして、勝手に時を送りました。母達の側には別に小机が置いてあつて、隣の家の娘がそこで手習ひをしました。お文さんと言つて、私と同年で、父から讀書を受ける為に毎日通つて來たのです。父を「お師匠様」と呼んだのは斯の娘ばかりでなく、村中の重立つた家の子はあらかた父の弟子でした。中には隣村から通つて來るものもありました。」

(註12)

東京で学ぶために上京する九歳の藤村を前にした父についてもわずかながら語られている。

「其晩、私は父の書院へも呼び附けられて、五六枚ほど短冊に書いたものを餞別として貰ひました。それは私が座右の銘にするやうにと言つて呉れたので、日頃少年の私をつかまへて口の酸くなるほど言つて聞かせた教訓を一つ一つ文字に表はして書いたものでした。私はその全部を記憶しませんが、父があゝの几帳面な書體で認めた短冊の中には、ありありと眼に浮んで來るものもあります。

「行ひは必ず篤敬。云々。」」

(註13)

その父が書いたものを東京で見る場面もある。

「壁によせて、抽斗の附いた本箱をも置きました。抽斗の中には上京の折に父が餞別に書いて呉れた座右の銘なぞが入れてあります。稀には私は幾枚かある其短冊を取出して見ます。『温良恭謙讓』と一行に書いたのがあれば『勉強』とか『儉約』とかの文字をいくつも書き並べたものもあります。私は器械的に繰返して見て、寧

ろ父の手蹟を見るといふだけに満足して、復た紙に包んで本の抽斗の中へ藏つて置きました。國許の父からはよく便りがありました。父は村の中の眺望の好い位置を擇んで小さな別荘を造つたとかで、母と共に新築の家の方へ移つたことや、その建物から見える遠近の山々、谷、林のさまなどを書いて寄しました。其頃から漸く私も父へ宛てゝ手紙を書くやうに成ました。」

(註14)

そして最後に会った時のことである。藤村が直接に共に行動した場面なので、その部分すべてを次に再現しておきたい。

「父が私に逢ふのを楽しみにして一度上京しましたことは、私に取つて忘れ難いことの一つです。何故かと言ひますに、それぎり私は父に逢ひませんから。

豊田さんの家の奥の二階は廣い静かな座敷で、そこに父は旅の毛布やら荷物やらを解き、暫時逗留しました。豊田のお婆さんの亡くなつた連合だの、親戚にあたる年老いた漢學者だの、其他豊田さんの身のまはりの人で父の懇意な人は澤山ありまして、國に居る頃は父もまだ昔風に髪を束ねまして、それを紫の紐で結んで後の方へ垂れて居るやうな人でしたが、その旅で名古屋へ來て始めて散髪に成つた話などを私にして聞かせました。私は心の中で、お父さんも大分開けて來たと思ひました。

「あれは彼様と、これは斯様と——」

そんなことを父はよく獨語のやうに言つて、自分の考へを纏めようとするのが癖でした。

奥の二階からは廣い物乾場を通して町家の屋根、窓などが見られます。父は旅の包の中から桐の箱に入つた鏡を取出しましたから、

「お父さん、男が鏡を見るんですか。」

と私が尋ねますと、父は微笑んで、鏡といふものは男にも大切だ、殊に斯うして旅にでも來た時は、自分の容姿を正しくしなければ成らないと私に話しました。

父は随分奇行に富んだ人で、到るところに逸話を残しましたが、しかし子としての私の眼には面白いといふよりも氣の毒で、異常なといふ

よりも突飛に映りました。斯の上京で私はそれを感じたのでした。私の學校友達の六ちゃんの家へも父が訪ねて行かうと言ひますから、私は一方には嬉しく思ひながら、一方には復た下手なことをして呉れなければ可いかと唯そればかり心配して、三十間堀の友達の家へ案内して行きました。六ちゃんの家ではお母さんが後家さんで六ちゃん達を育てゝ居ました。訪ねて行くと、先方でも大層喜んで呉れましたが、別れ際に父は六ちゃんのお母さんからお盆を借りまして、土産がはりに持つて行つた大きな密柑をその上に載せました。やがてツカツカと立つて、その密柑を佛壇を備へたといふものです。斯ういふ父の行ひが少年の私には唯奇異に思われました。私は父の精神の美しいとか正直なとかを考へる餘裕はありませんでした。何でも早く六ちゃんの家を辭して豊田さんの方へ父を連れ歸りたいと思ひました。

父は私の通ふ學校を見たいと言ひますから、數寄屋河岸の方へも案内しまして赤煉舎の建物を見せました。河岸に石の轉がつたのが有りましたら、子供の通ふ路に斯ういふ石は危いと言つて、父はそれを往來の片隅に寄せたり、お堀の中へ捨たりするやうな人でした。

父が逗留の間に舊尾州公の邸をも訪ねました。その時、私も父に伴はれて、以前の尾張の殿様といふ人の前に出ました。父は私が學校で作つた鉛筆畫の裏に私の名前などを書いたものを尾州公の前に差出しました。私は廣い御座敷に身を置いて燈火の影で大人の話をするのを聞いたのと、歸りに御菓子を頂いて來たのとその他に今記憶して居ることも有りません。父は又淺草邊の鹿の子といふ飲食店へも私を連れて行つて、そこあるじの主人や内儀さんに私を引合わせました。『斯様なお子さんが御有りなさるの。』と内儀さんは合相よく言つて、父と私の顔を見比べました。私は内儀さんばかりでなく多勢の女中からジロジロ傍へ來て顔を見られるのが厭でした。鹿の子の主人は地方出で、父とは懇意な人でした。

その時の私の心では、私は矢張郷里の山村の方に父を置いて考へたいと思ひました。私は一日も早く父が東京を引揚げて、あの年中はたび稽火の

燃えて居る爐邊の方へ歸つて行つて、老祖母さんやお母さんや、兄夫婦や、それから太助などと一緒に居て貰ひたいと思ひました。久し振の上京で、父は東京にある舊い知人を訪ねたり、亡くなつた人の御墓参をしたりしまして、間もなく郷里の方へ戻つて行きましたが、後で國から出て來た人の話には、餘程私が嬉しがるかと思つて上京したのに、子供には失望したと言つて、父が郷里へ戻つてから嘆息して他に話しましたとか。』(註15)

この最後に会つた時の姿は『櫻の実の熟する時』の第七章でも同じエピソードに基づいて、語られている。ちなみに『櫻の実の熟する時』の部分はパリから帰国後二年半近く過ぎて書かれたものである。フランス体験があるにせよ、この時点で父親の姿を登場させるにしてもこの程度が限度であろう。何故ならばこの作品そのものは、藤村の若き日の姿が描かれているのであって、父親が思い出されても、その内面に立入ることは無意味であつたから。

父親不在の生活にあっては、父親の内面などは知る由もないし、関心もなかつたであろう。奇行に富んでいれば、なおさらである。むしろ何をしでかすかという畏れのみで、その様子を上に引いた文面からもうかがわれる。最後の部分にある父の嘆息が付け加えられたのは、父の心を理解しようとしなかつたことへの後悔の表われであろう。

『幼き日』を書いた動機については、これが収録された「定本版藤村文庫」の第七篇のあとがきで触れられている。

「書いて見ると、いろいろなことが書けた。わたしはよく自傳的な作者のやうに言はれてゐるがこれはたゞ自傳の一部として書かうとしたものでもない。自分の生命の源にさかのぼらうとする心を起した時にこれが書けた。」(註16)

自らが陥つた状態をどうにかしたいという思いが故にこの作品『幼き日』を著わしたと言える。つまり、模索状態にありながらも、父親の生きた時代にその方向性を求めていたのである。

これまで見てきたとおり藤村が描き出した父親

像はすべて外面からのものであって、内面に立ち入った形で描かれているものではない。

## VI-1-(3)

これまで引用してきたエピソードのほとんどは『新生』の百十三章から百十九章までに再度描かれている。そしてこれらの章に先立って、主人公岸本の、そして藤村の落ち込んだ気分が百十二章で語られている。このような気持ちになったのも、第一次大戦下のパリにあっての社会情勢への不安、姪とのこと、そしておそらくは暗雲低く垂れこめたヨーロッパの冬の風景が影響したのであろう。祖国の新聞への掲載記事も途絶えがちであった。『藤村のパリ』と題して河盛好蔵氏が「新潮」に現在連載中であるが、その第二十回の部分でこの時の様子を指摘している。

フランス体験を藤村は帰国後に著わしているが、その中のひとつに『地中海の旅』と題した紀行文がある。フランスにおもむく途中の船旅の一時期を亡き父親宛てに手紙形式で語る内容となっていて、同じ船に乗り合わせたヨーロッパ人との交流がその中心となっている。この中に注目したい語риがある。

「まだ私がこの旅を思ひ立たない以前でございました。あなたの墓を建てるために一度歸省したことがございました。其節、私は姉の家へ立寄り、あの舊い家に残つた黒船の圖といふものを見てまゐりました。粗末な木版刷ではありましたが、それを見てもあの異國の船がいかに當時の人の眼に映じたかといふことが思はれました。まるで斯の圖は幽霊の圖です、と私は姉にも申したことでした。何といふ驚異の念が、何といふ不安と狼狽とが、そこに表はれて居りましたらう。あの全く別の世界を暗示するかのやうな、迫り来る外來の威力の象徴とも見るべき幻の船が、いかに青年時代のあなたの心をもなやましたかは略想像致されました。」(註17)

ここに書かれている木曾への旅は、明治四十二年の十月である。その直後に書かれたものを見ておきたい。初出は不明であるが、『黒船』と題を

つけられ、隨筆集『後の新片町より』に収録された。ごく短いものなので全文を次に引いておく。

「黒船——歴史小説としても、又歴史畫としても、面白い題目ではあるまいか。私はこの秋、木曾に旅して、姉の家であの船の圖を見出した。半紙一枚程の大きさの古い粗末な木版畫だが、それを見ると當時のことも想像される。いかにあの船が當時の人の眼に映じたらう。そのために幾何<sup>いくばく</sup>の人が狂死したらう。

黒船の姿を變へたものは、幾艘となくこの島國へ着いた。

しかしまだ足りない。トルストイにせよ、イブセンにせよ、一般の眼にはまだ幽霊だ。吾儕<sup>われら</sup>はもつと黒船の正體を見届けねばならぬ。そして夢を破らねばならぬ。吾儕は事々物々現代の西洋に接觸しつつあるとはいえ、まだ間接たることを免れない。」(註18)

すでに江戸末期の時代について藤村が関心を抱いていたのは間違いない。むろんここに記されている「幾何の人」とは父親を想定しているのである。

「黒船」とは藤村にとって何を意味していたか。先進国の文化として良いだろう。この時点では、もちろん多くの作家たちや彼らの作品を数多く知っていたであろうし、未だ見ぬ異國の文化についても知ってはいたであろう。しかし、異文化の中に放り込まれぬ限り、表面を撫でてに過ぎない。本論で先に明らかにしたように、自然主義文学の行き詰りがあった。藤村がこの「黒船」に関心を持ったのはこの時期である。この状況を打破するためにも、「黒船」を題材として小説を書くと考えても不思議ではない。しかし、藤村の内側から強く噴き出るかのようなものにはなり得なかった。つまり、同様に本論ですでに明らかにしたように、何よりも自らの位置がどんな地点にあったかが不明であったのだから。

これまで藤村のフランス体験を、『新生』を辿りながら見てきた。だが藤村と姪との関係が中心であって、いわば藤村の女性に対する考え方の変遷であった。藤村の人間への、とりわけ女性への信頼ということが何であるかを知って、自らの心

の落ち着きを獲得する過程を描いたのが『新生』である。この『新生』に父親への思いを廻らすとは言え、その思いから発展し、どんな地点にまで到達したかは描かれてはいない。

『新生』が書かれたのは、帰国後二年近く経た大正七年五月からである。それ以前に、先にも触れたが、いくつかの紀行文を公にしている。姪との関係は未だ公にはできない。この時点で話すことができたのは、フランス体験のもうひとつの重要な側面、つまり先に触れた「黒船」に関わる点である。これらの紀行文において、ヨーロッパでの生活で知った西洋と日本との比較から生じたものが整理されている。何回かにわたって書かれたものが収録され、大正七年七月『海へ』として出版された。(註19) 内容はフランス滞在を除いた往復の船旅の様子を書いたものとなっている。先に引用した『地中海の旅』も第二章として収録されている。船旅としては最後になっている第五章の「故國に歸りて」は、実は最初に書かれたものである。この章の十七に次のように記述されている部分がある。

「お前は西洋嫌ひに成つて歸つて來たといふ評判だが、事實か、とある友人に私は尋ねられた。すくなくも自分の旅は辛かつたとは私は言つても、そのために西洋が嫌ひに成つたかと聞かれては一寸當惑する。

私の佛蘭西だよりは『平和の巴里』、『戦争と巴里』の二小冊子に纏めてある。あの手紙の全部が、私としてはその一番好い返事だ。あれを書いた時も、今も、私の心持は變らずにある。あの巴里ポオル・ロワイアルの客舎の窓で、『自分は巴里を賛美する爲に斯の机に對つて居るものでも有りません』とは書いたけれども、私がガセエヌの河畔なぞを歩いて見る度に佛蘭西人の組織的才能と傳統を重んずるその冷静な意志とに對して尊敬を羨望の念に堪へなかつたことは、あの手紙の中に言つて寄した通りだ、そこにある歴史の尊重、學問の尊重、藝術の尊重は、實に想像以上であつた。今も猶私はあのラテンの民族の天才を愛する美しい精神を賛美するに躊躇しない。是程の自分がどうして左様西洋嫌ひに成つて歸つて來られよう。つくづく私は佛

蘭西あたりにある歐羅巴のクラシカルな文明を、クラシカルでそして同時に近代的なあの大きな包容の力を羨んで來た。それだけ私は自分の國の方のことを考え續けて來た。何一つ日本に好いものがあるか、何一つ世界に向つて誇り得るものがあるか、と言ふ海外在留の同胞に邂逅ふ度に吾儕は左様いふ破壊の思想からも自分の國を護らねばならないと思つて來た。

左様だ、吾儕日本人はまだまだ保守的だ。吾儕に必要なことは國粹の保存でなくて、國粹の建設でなければ成らないのではないか。吾儕はもつともつと歐羅巴から學ねば成らない。そして自分等の内部にあるものを育てねば成らない。」(註20)

藤村の文化比較である。ヨーロッパを見ることで日本の文化の貧困を思う。嘆きもする。誇り得るものは無しとする。だが藤村はその様な考え方を警戒する。そう思うことは「破壊」だとする。むしろ、しなければならないことは藤村がフランスに居て自分の幼い頃のことや父親の生きた時代のことなどを振り返ったように、日本の過去を単に見るというより、日本の文化として蓄積されてきたものを見直す必要ありとしたのである。とりわけ西洋のものをどのように受け留めるかという視点を定める必要ありとしている。

そして、とにかく西洋を見て來た眼で東京を眺める。

「風俗に就いて、歸朝後の私の眼に好ましく映つたのは、お店者の風だ。東京の下町のお店者の風は好い。信州の神津君が上京の砌、私は君に誘はれて帝劇の舞臺の上に杵屋の連中を見た。あの白襟紋付の風も好い。」(註20)

至るところに日本の良さを見出し、隅田川に語りかけえする。その語りかけにしばらく耳を傾けてみたい。

「流れよ、流れよ、隅田川の水よ、少年の時分からの  
お前の舊馴染が復たお前の懷裡へ歸つて來た。……略……

もう一度私はお前の岸に歸つて來てお前の水を

見得ることを喜ぶ。私が旅に出た時分から見るとお前は一層黙つて了つたやうな氣もする。お前の聲は奈何したらう。何時迄お前は其様に沈黙を續けて居るのだらう。お前の河岸の變遷と工業化に壓せられて、お前の白魚が死にお前の都鳥が飛去つたやうに、お前の聲も涸れ果てたのだらうか。遙に川上の方から渦巻き流れて来るお前の水が有るかぎり、お前の詩が涸れ果てようとは奈何しても思はれない。私はお前から溢れて来る詩を知りたい。お前の沈黙を破つた聲を聞きたい。随分お前も長い目で岸の變遷を眺めて來た。兩岸が武蔵野であつた昔からのお前だ。そこに建てられた大きな都の發達を知悉して來たお前だ。舊兩國が一切の交通の中心で、用を達すにも物を運ぶにも舟の便利に據らなければ成らない時代からのお前だ。お前は驚くべき大改革を眼のあたりに見て來た。江戸の崩壊を。政事の改變を。憲法の制定を。廣く知識を世界に求めよう、世界のありとあらゆる處から採り得る限りのものを採らう。之がお前の見た維新當時に於ける熾盛な精神ではなかつたか。新しいものが斯くしてお前の岸へ押寄せて來た。亜米利加からも。仏蘭西からも。英吉利からも。獨逸からも。そして改良に次ぐに改良、破壊に次ぐに破壊を以てした結果、それらの性質を異にしたものが各自思ひ思ひの様式と主張と確執とをもつて雜然紛然たること恰も殖民地の町を見るごとくにお前の兩側に移植された。時代の象徴とも見るべき造形美術、殊に建築を見渡すと、お前の岸にあつたものが餘りに温和しく、餘りに弱々しく、餘りに纖細で、新しく西洋から入つて來た組織的なものの爲に何となく蹂躪されて了ふやうな氣がして、可傷しくて成らない。今になつて斯の不調和を嘆くは遅いかも知れない。しかし吾儕日本人が餘りにクラシックを捨て過ぎたと氣付くことは決して遅いとは言へない。吾儕は廣く知識を世界に求める程の銳意と同情とに富んで居る。唯吾儕はそれを受納れるに當つて強い判斷力を缺いた。言葉を更へて言へば歴史的の意志を缺いた。それが吾儕の缺點だ。吾儕は自己の支配者では無くなつて了つて居た。唯新しいものの入つて来るに任せて居た。お前の岸における不思議な不統一。私はそ

れをお前に問ひたい。お前が眼のあたりに見た驚くべき大改革とは人の心に『推移』をば齎したらう、しかしながら人の奥に『改革』を齎したらうかと。それを思ふと私は言ひ難い幻滅の悲哀に打たれる。お前はセエスでもなく、テムムスでもなく、矢張一番親しみの深い隅田川だ。往昔、多感多情な詩人が口吻の紅い都鳥を見て情人の生死を尋ねた歌をお前に残した。それほど古い歴史のあるお前だが、私は若いお前を夢見つゝそれを頼りにして遠い旅から歸つて來た。何となくお前の水はまだ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照り渡つて居ないやうな氣がする。お前の日の出が見たい。」（註22）

長過ぎた引用になつてしまったかもしれない。この部分は『海へ』の最後の部分である。父親への思いが進展し、到達した地点である。姪のことだけに藤村の思索が捉われることはもうない。藤村はすでに現状の日本とその文化、そして過去における日本の文化にも思いを廻らしているのである。

「僕は斯様な風にも考える。印度や埃及や土耳其あたりには古代と近代しか無い、と言つた人の説には全く賛成だ。幸ひにも僕等の國には中世があつた。封建時代があつた。長崎が新嘉堡に成らなかつたばかりじゃない、僕等の國が今日あるのは封建時代の賜物ぢやないかと思ふよ。見給へ、日本の兵隊が強いなんて言つても、皆な封建時代から傳はつて來たものの近代化だ。兵隊はまあ一例だが、僕等の國に今有るものは何一つとして……好いものでも、悪いものでも……どうかすると僕は旅に居て自分の國のことを考へて、まだ前世紀が自分等の中にも生きて居るやうな氣のすることも有る。眞實に自分等は革命といふものを経て來たのか知らんと疑ふやうなこともある。」（註23）

上に引用したものは『海へ』の第四章「故國をみるまで」の中に書かれたものである。帰国の船に乗り合わせたエトランゼエとの会話で、藤村の発言内容である。この人物と上海で別れるのであるが、エトランゼエとはフランス語の ETRANGER

(異邦人の意)である。会話の内容からして時には藤村自身の心の中でのやりとりのようにも思える。この点はともかくとして、ここに引用した考え方は次のように考えられよう。明治維新によって、江戸時代からのものを断絶させてしまってはならない。つまり、歴史的な見方を失ってはならず、過去の遺産を容易に否定することもせず、蓄積された遺産として受け留める。

藤村にこのような歴史的な見方が備わった今、父親をモデルとする小説は可能である。だが、単なるドラマ性を父親に求めたのではなく、歴史との関わり合いの中で父親の姿を求めようとしたのが『夜明け前』と言えないだろうか。

(以下次号)  
(1989. 2. 1 受理)

#### 註

1. 『藤村全集第十三巻』、筑摩書房、昭和53年、P. 325
2. 同書、P. 349
3. 『藤村全集第十二巻』、筑摩書房、昭和53年、P. 547
4. 同書、P. 549
5. 『藤村全集第三巻』、筑摩書房、昭和53年、P. 97  
～ 98
6. 『藤村全集第四巻』、筑摩書房、昭和53年、P. 12  
～ 13

7. 同書、P. 51～52
8. 同書、P. 300～301
9. 同書、P. 320～321
10. 同書、P. 387～388
11. 明治四十五年五月から大正二年四月まで「婦人畫報」に連載されたもの。
12. 『藤村全集第五巻』、筑摩書房、昭和53年、P. 385  
～ 386
13. 同書、P. 392～393
14. 同書、P. 402～403
15. 同書、P. 411～413
16. 同書、P. 596
17. 『藤村全集第八巻』、筑摩書房、昭和53年、P. 50
18. 『藤村全集第六巻』、筑摩書房、昭和53年、P. 136
19. 実業の日本社から出版された。なおフランス滞在中のことを書いたものに『エトランゼエ』がある。朝日新聞に連載されたが、八十三以降は雑誌「新小説」に連載され、大正十一年春陽堂から出版された。
20. 『藤村全集第八巻』、筑摩書房、昭和53年、P. 179  
～ 180
21. 同書、P. 182
22. 同書、P. 184～185
23. 同書、P. 121